

【小学校・中学校・義務教育学校用】

令和4年度学校評価 計画

達成度（評価）	
A	: 十分達成できている
B	: おおむね達成できている
C	: やや不十分である
D	: 不十分である

学校名	唐津市立田野小学校
1 前年度 評価結果の概要	1学期（7月調査）と3学期（1月調査）の比較から検証してみると、全体的にポイントが上がっている。評定がBの項目も、ポイントをみると1学期よりも上がっているため、少しずつではあるが努力していることが伺える。ただ、学力向上「家庭学習」の項目は、児童のポイントが下がっており、以前から続いている家庭学習の取組を保護者と協力を呼び掛けて根強く取り組んでいく必要がある。来年度は、家庭や地域との連携を密にし、子供たちが内発的動機付けのできる授業づくりの指導法を改善し、「未来を見つめ、たくましく、のびのびと、こころゆたかに生きる田野っ子の育成」を実現できるように徹底して取り組んでいきたい。
2 学校教育目標	未来を見つめ「たくましく のびのびと こころゆたかに」 生きる 田野っ子 の育成
3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> <li>○子供に学力をつける……個に応じた指導を通して、学ぶ意欲・基礎的・基本的な学力・思考力・表現力の向上をめざす</li> <li>○子供に夢や目標をもたせる……日々の学習や生活の中で、将来に向けての夢や目標をもって取り組む児童の育成をめざす</li> <li>○家庭・地域との連携を図る……家庭学習や生活習慣の定着および地域と一体となって活動する学校をめざす</li> <li>○職能成長を図る……研修の充実を図り、新しい教育課題に対応できる教職員の資質能力の向上をめざす</li> </ul>

4 重点取組内容・成果指標 中間評価 5 最終評価

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価		学校関係者評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提案
●学力の向上	●全職員による共通理解と共通実践	●学力向上対策評価シートに示したマイルズの成果指標を達成した教師80%以上	●教職員間でマイルズを共有し、「学び方7か条」に基づく学習規律の継続と徹底を図り定着させる。 ・学力を向上させるための手立てを校内研修や日頃の授業の中に取り入れ、教職員間で共有する。 ・じっくりと思わせる場を設定した授業を行い、自分でできる喜びを学習意欲につなげさせる指導を図る。	B	・校内研で学力を向上させるための手立てについて実践交流を行い、手立てを共有した。 ・学力を向上させるための手立てを校内研修や日頃の授業の中に取り入れ、教職員間で共有する。 ・「唐津の学びスタイル」を活用し、児童の主体性を引き出す單元づくりと、ふり返り活動の充実が図られている。	B	・学力向上対策評価シートで掲げた児童の情意面に関する質問紙調査で、90%以上が肯定的な回答をした。マイルズでもほとんどの教師が成果指標を達成している。 ・校内研の実践交流で共有した様々な手立てを実施し、指導の充実につながった。	A	・校内研修、級外の昼休みの個別指導等の取組が学力向上につながっていると思う。
	○唐津市学力向上推進校としての校内研の推進	○12月の県調査において、学力向上対策評価シートで掲げた到達目標を、すべての学年・教科で達成する。(4～6年生) ○1月実施予定の標準学力調査において、全学年レベルの正答率に到達する。(1～3年生)	・唐津の学びスタイルに基づき(授業実践について、全職員が定期的に自らの実践をチェック・検証し、共通理解を図る) ・CT活用を推進すると共に、市の学力向上推進校として1人1台端末を用いた授業公開をする。 ・基礎基本の学力を高める取組として、朝の時間や昼休みなどを利用して、全職員で徹底して指導にあたる。	B	・学力向上推進校としての取組を通して、1人1台端末活用による授業改善について提案し、校内研究を通して継続的に職員同士の情報共有、及び共通理解に努めている。 ・個人差に対応した学習支援を、課題の与え方の工夫や、休み時間等の個別指導を通して行い、最後までやり解く達成感を味わっている。	A	・12月の県調査や1月の標準学力調査の結果は、すべての学年で前年度より正答率が大きく向上した。 ・1人1台端末の活用による授業改善を通して、考えの広がりや深まりが見られるようになった。 ・級外による昼休みの個別指導を通して、個人差に応じた学習支援ができた。	A	・授業に積極的に参加している児童が多いと思う。教師主導ではなく児童を中心に授業を進めるを先生方が意識されているのを感じる。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○相手の立場に立って、考えを述べたり、折り合いをつけたりできる児童80%以上	○年7回の「心の集い」(人権集会)を実施し、児童の人権意識を高める。 ・道徳の授業において、「考え、議論する」授業形態を通して、道徳の実践力を育成する。	B	・定期的に心の集い(人権集会)を実施している。職員が交代で、人権に関する様々な内容について話をすることで、児童の人権意識が高まった。 ・道徳の授業では、各学級で活発に意見交換することができている。	B	・年間を通して定期的に心の集い(人権集会)を行い、幅広い道徳的内容について、全校で共に学び、考えることができた。 ・心の集いの直後の授業を全校一斉に道徳とし、積極的に意見交換をすることができた。	A	・素直で優しい子どもが多いと思う。 ・学力ももちろんだが子どもにとって心の教育が一番大切だと思います。心の集いではそれぞれの先生方の伝えたい思いの話をそれぞれに聞かれています。子どもたちは心豊かに育っていると思います。
	●いじめの早期発見、早期対応体制の充実	○生活アンケートやQ-Uテストで気になる児童の早期発見に努め、「学級生活満足群」の割合を80%以上にする。	○生活アンケート、Q-Uテストの実施後、研修会を通して分析を行い、学級経営に生かす。 ・学級経営案の中に「いじめ防止」の視点を取り入れ、児童を観察し、未然防止、早期発見、早期対応に務める。	B	・隔月の生活アンケートを実施し、集計・分析した結果を全職員に伝え、全校で指摘した。Q-Uテストの研修会も夏季休業中に実施した。 ・心の定期アンケートに加えて、11月から心のアンケートを実施し、個別に聞き取りを行った。	B	・生活アンケートの集計・結果を全校研修の前に全職員に配布し、生活指導を行った。また、月別目標については、指摘前に児童に毎日振り返りさせ、POCAサイクルで取り組むことができた。 ・心のアンケートの内容を改訂し、簡略化した。	A	・定期的にいじめアンケートを実施され、また子どもの声にも耳を傾けられ、対応も早く子ども達も救われていると思います。
●健康・体づくり	◎自らの夢や目標の実現に向けて努力する気持ちをもてるための教育活動	○自己肯定感を高める、自らの夢や目標の実現に向けて努力している児童の割合を75%以上にする。	・キャリアパスポートの活用をする。 ・地域人材や資源を活用した田野小ならではの体験活動を行う。 ・地域外部講師を招聘し、「望ましい生き方」の育成を図る学習を仕組む。 ・体験型、外部型、外部企画を積極的に活用する。	B	・キャリアパスポートの作成・ファインリングを通して、自分の目標を定期的により振り返り、成長を実感している児童が増えている。 ・感染症対策をとりながらも外部講師を招聘した地域連携型の体験活動を通して、自己肯定感を高めたり、地域への愛着を深めている児童が増えている。	B	・地域の方を講師に、サツマイモや大豆、米の栽培と収穫をはじめ、餅つきや豆腐づくりなどの体験活動を通して、地域への愛着と感謝の気持ちを育む活動を行った。 ・「目標に向かって努力しているかどうか」を問うアンケート(2月実施)では、ほとんどの児童が肯定的な回答をした。	A	・地域の人達など身近な大人の方を見られる機会が多く、自分の得意、なりたい夢や夢について考えやすくなったと思う。 ・道徳の授業を何回か参観したことがあります。夢を叶えた人物や志をもって努力した人物についての授業でした。子どもたちは「あんな人になってみたい」という思いを持ったと思います。
	●「健康に食事は大切である」と考える児童生徒70%以上	●「健康に食事は大切である」と考える児童生徒70%以上	○6月の食育月間に合わせて、食事に関するアンケートを行う。(集団、個別) ・2学期に再度、食事にに関するアンケートをとり、変更を見る。 ・1月の全国学校給食週間では、すこやか委員会主体で、給食や食事についての興味・関心が高まるような取り組みを行う。	B	・「健康に食事は大切である」と考える児童は83.3%であった。(学年、心にかきあがり) ・6月の食育月間に食事に関するアンケートを実施し、児童の健康状態や給食の実態を把握し、それをもとに掲示物や保健だより等で保護者に現状や課題について啓発を行った。 ・心のかきあがりアンケートに加えて、11月から心のアンケートを実施し、個別に聞き取りを行った。	B	・2学期にアンケートの実施はできなかったが、毎日の健康観察の結果、ほとんどの児童が朝食を食べてきている。 ・全国学校給食週間では、児童集会で、すこやか委員会の児童が「給食の歴史」について発表した。さらに保健室前に「食育クイズ」を掲示し、給食や食事、食べ物の興味・関心を高めることができた。	A	・朝食をきちんと食べている子どもも多い。米作りや大豆の栽培、加工まで体験することができ、食育にもつながっていると思う。 ・学校での菓園活動、また地域の方との体験活動は最高だと思います。この活動を通して食育へとつながっていると思います。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●運動習慣の定着化及びスポーツチャレンジの実施	●体づくり運動を奨励し、朝や休み時間での外遊びの習慣化を図る。 ●スポーツチャレンジ達成率94%以上	●全校体育を年間9回実施する。 ・雨天時に、体育館使用を奨励する。 ・スポーツチャレンジの成果を掲示板などで学年別に掲示する。	B	・昼休みは運動場でサッカーをしたり、おにごっこをしたり外遊びをする児童が多い。 ・全校体育は今日まで全て実施できている。 ・スポーツチャレンジの結果を学年別、縦割りで掲示している。 ・スポーツチャレンジでは、7種目中5種目は実施できている。	B	・昼休みに子供たちと外で体を動かす、体づくり運動を奨励することができた。 ・スポーツチャレンジの取り組みは目標には届かなかったが、県でも優秀な成績を残し、結果を出した。 ・スポーツチャレンジの児童の成績を掲示し、児童のやる気を引き出すことができた。	A	・昼休みは室内で遊ぶのが好きな子がいれば、学習や委員会の当番などで過ごす指導されていると思う。 ・昼休みに学校の近くを通ると、元気いっぱい走り回っている子どもと、一緒に遊ぶ先生方の姿を見てうれしい気持ちになります。
	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●業務効率化の推進と時間外勤務時間の削減	●会議における時間短縮と効率化を図る。 ・前月の時間外業務時間を伝え、45時間を意識させる。 ・定時退勤日の実施と、終わりの時間を意識した働き方へ取組を図る。	A	・会議の効率化を図り、これまでの会議は全て勤務時間内に終えることができた。 ・前月の時間外業務時間は約2時間であった。これは全職員が退勤時間を意識した働き方を心がけた結果と捉える。	A	・4月から2月までの時間外勤務時間の平均は、約22時間であった。多い職員でも、月45時間を下回った。時間を意識し、メリハリを付けた働き方が定着してきた。 ・定時退勤日には、職員が相互に声を掛け合い、実行することができた。	A	・働き方改革について先生方も努力されていると思う。保護者の理解も必要と思う。 ・以前は平均残業時間で仕事をこなしていた記憶があったので、現状を聞いてホッとした。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	○職場の環境整備	○明るく働きやすい職場づくりを目指し、職員同士の相互理解を図り、「働きやすい」と回答する職員90%以上。	●職場三原則の励行 ①礼を正す ②時を守る ③場を清める ●職員スピーチの実施	B	・職員が互いに声を掛け合い、会議等の開始時刻や文書の提出期限などは遅れることなく守られた。 ・昨年度に引き続き、職員連絡会後の職員スピーチで、職員相互理解を図ることができている。	B	・昼休みには、児童と遊んだり配慮を要する児童への個別指導等で、職員同士が話す場面はあまりなかったが、放課後は、職員同士が学習、生徒指導、行事等について話す場面が多く見られた。	A	・学校に行った時に、多くの先生方から声をかけてもらえる。先生方同士が楽しく話をする姿もよく目にします。そんな先生方に囲まれて子どもたちも育っていると思う。

(2)本年度重点的に取り組む評価項目

評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価		学校関係者評価	
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果	評価	意見や提案
○危機管理の徹底	○コロナ対策や保護者対応、個人情報漏洩などの意識の向上	○危機管理意識が高まった教師95%以上	●コロナ感染症対策強化のため、保護者、職員と情報を共有する。 ・管理職への報告、連絡、相談の徹底を図る。 ・職員会議や連絡会を「ゼロの日」と定め、全職員で服務規律の保持について再確認する場を設ける。	A	・感染症対策は全職員で情報共有、統一した取り組みができた。また、検温や登校見合わせなど、保護者も協力していただいた。 ・危機管理について、ヒヤリハットのスピーチを交えながら定期的に確認する場を設けることができた。	A	・危機管理についてのアンケートでは、ほぼ全員の職員が高い意識を持って取り組むことができたとの回答であった。感染症対策の児童アンケートでは90%以上の児童が、自分から進んでできているとの回答であった。日頃からの継続的な声掛け、指導の効果である。	A	・感染症対策や避難訓練など、先生方が全員でよく指導されていると思う。 ・コロナ対策では、先生方の継続的な声掛けや指導で、子どもたちも新型コロナウイルスの感染症を認識していた。
○特別支援教育及び個別の支援の充実	○教員の専門性と意識の向上	●特別支援教育の研修会を年2回以上実施する。 ・必要に応じて心理検査を行う。	●特別支援学級と通級指導教室の連いを唐津市内の設置校の動向と現状を知らせる。 ・夏季休業中に校内研修を計画する。支援を要する児童に対しての有効な支援方法について職員研修を行い、共通理解を図る。	B	・夏季休業中に特別支援学級についての校内研修を行うことができた。通常学級で配慮が必要などどういった支援体制についても今後、検討していく必要がある。 ・個別の教育支援計画を持っていない児童についての今後の学校生活の支援について職員間で共通理解をしていく。	A	・校内の特別支援が旧在籍児童だけでなく通常学級在籍の児童2年生・3年生・4年生の3名についてWISC-3 知能検査を行い、保護者に報告をし、校内でできる支援について保護者と支援会議を通して、共通理解を図った。 ・「学びの活用性」の理解～支援をどうつなげるか№1授業でできる支援「学びの多様性の理解～支援をどうつなげるか№2疑似体験を通して校内職員研修を行い、職員のスモールアップを図った。日々の学習支援につなげていくことができた。	A	・穏やかな指導、配慮をするよう努めていると思う。 ・子どもへの宿題を見たり話したりする中で、先生方は個々に寄り添い、その子に合った学習内容、支援をされていると感じる。
○1人1台端末の活用	○タブレット活用の向上	○学習の中で、タブレットを役立てることができたと感じる児童80%以上。	●タブレットの利活用を推進する。 ・協働学習による授業改善(オンラインシステムの利活用推進)の取組 ②ドリル学習による主体的な学習の取組	B	・オウリング等を使って、意見を積極的に交流する授業を行うことができた。 ・朝の時間や長期休業中には、個人の学習の進度に合わせてドリルパークの学習に取り組むことができた。	B	・児童が必要に応じて、自主的にタブレットを使って調べ学習を行うことができた。 ・年間を通して、オウリングやハワードポイントを活用して、授業中の意見交流を行うことができた。 ・ドリルパークを活用することで、個人の学習進度に合わせた個別学習を実施することができた。	A	・タブレット端末を使った学習が普通になってきたと思う。 ・タブレットを活用した授業を観てびっくりした。コロナ禍においてタブレットはなくてはならないと感じた。

5 総合評価・次年度への展望	<p>●…県共通 ○…学校独自 ○…志を高める教育</p> <p>・学力向上への取組として研究授業だけでなく、日頃の授業実践や家庭学習の出し方について定期的に職員間で情報交換の場を設けた。これにより話し合いのさせ方や支援の方法を学び、指導の充実につながった。今後も継続し、職員の豊富な経験を職員で共有し、指導力を高めている。 ・心の教育では、心のアンケートやQ-Uテストを実施して児童理解に努めた。また、教育相談や心のアンケートも回答を増やし、児童からのサインを受け止める機会を増やした。継続可能な方法を模索しながら、いじめの早期発見、早期対応に努めていく。 ・授業や家庭学習での1人1台端末(タブレットPC)の活用を全職員で実践を重ねてきた。これからの教育現場ではIoTは無くはないものになる。今後は紙媒体の教科書やノートとタブレットPCのそれぞれの良さを吟味しながら実践を重ね、タブレットPCのより効果的な活用方法を探っていく。</p>
----------------	--